

2-3. 事業経過

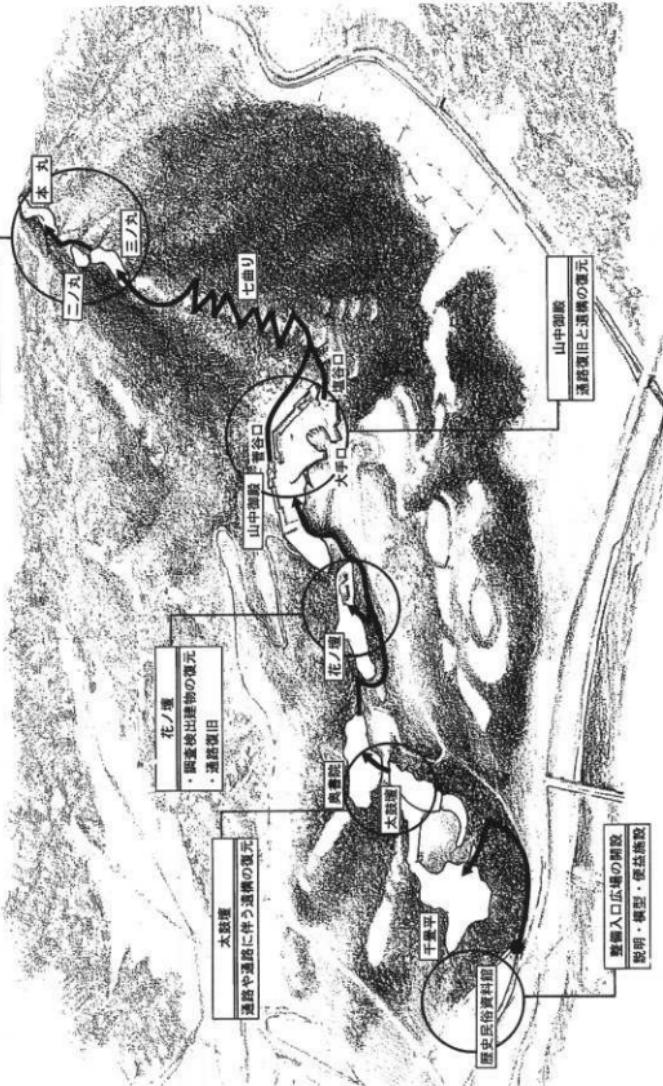
■事業着手と史跡等特別事業「ふるさと歴史の広場」事業

史跡富田城跡と整備等事業について、平成2年度「史跡富田城跡整備基本計画」をもとに、文化庁記念物課、鳥取県教育委員会文化財課と事業着手に向けての事業範囲と事業期間の協議・検討を行い、平成3年度より発掘調査等を主体とした「史跡富田城跡保存修理事業」に着手した。発掘内容は、基本計画で想定した通路跡や曲輪内遺構の残存状況及び破損状況の確認を主眼としたものである。平成3年度に本丸、二ノ丸等の虎口跡の調査、中山御殿の大手門跡等の確認調査を、平成4年度には花ノ塙の腰曲輪通路跡の確認等を実施し、整備着手のための準備を行った。

平成4年度、保存修理事業2年日において、その調査成果を基に先に挙げた短期整備範囲のテーマ：通路の復旧や遺構の整備、復元についてその残存遺構と保護・復元する内容を検討し、平成5年度からの整備とし、保存・活用についての事業計画を策定した。残存遺構は曲輪内遺構や通路跡、出入口となる門や虎口、また法面を造成するためには建物跡ばかりではなく、通路や曲輪形態、石垣など総体的に復元しなければ、その文化財の意味は把握できないものと考えた。また、公開するための説明施設や便益施設共、整備規模は相当量になることが予想された。

平成5年、国の史跡等特別事業「ふるさと歴史の広場」事業への計画作成を行い、歴史的建造物等の復元や立体模型展示、遺構展示等富田城跡の特徴を活かした事業内容として事業申請した。歴史的建造物等の復元は遺構確認した通路や通路を守る石垣、花ノ塙曲輪内の建物等の復元とし、城跡全城を立体的に見せる屋外展示模型は入口広場となる歴史民俗資料館の脇に、遺構露山展示は平成4年度で調査検出した腰曲輪通路跡造成のための精密な盛土版築締固の土層を、その他として説明・案内施設や便益施設また整備工事に伴う発掘調査等を事業内訳とした。入口広場とする歴史民俗資料館から月山山頂本丸まで約1.5kmにおよぶ往時の道路復旧と通路に伴う石垣や建物、各曲輪の虎口形態の復旧を目指した総合的な史跡環境整備事業である。

■「ふるさと歴史の広場」事業範囲の設定
二ノ丸・三ノ丸
道路、虎口の復旧



■「ふるさと歴史の広場」事業範囲の設定

■史跡等特別事業「ふるさと歴史の広場」で目標とした事業内容と範囲

主なる事業	整備項目	整備箇所	内 容
歴史的建造物等 復元工事	・通路跡、虎口	・花ノ塙下通路 ・二ノ丸、三ノ丸虎口	・土橋や階段、堀切も含む
	・石垣、曲輪形態	・花ノ塙、山中御殿 ・二ノ丸	・曲輪形成のための石垣や通路 ・鷲石垣
	・建物復元工	・花ノ塙	・曲輪景観の再現を図り、建物整備、堀跡の低木植栽による表示
遺構全体模型製作		・入口広場	・ステンレス積層によるコンタ表現と曲輪の遺構表示
遺構露出展示	・検出遺構展示	・花ノ塙、腰通路跡	・通路形成のための板築盛土締固土層の表示と覆屋
その他の その他	・説明、案内施設		・史跡遺構説明板及び順路標の設置
	・便益施設	・入口広場	・トイレ、休憩・管理施設の設置

■組織

		氏名・団体	所 属
指導 整備委員会	藤岡 大拙	島根県立女子短期大学教授	
	山本 清	島根大学名誉教授	
	井上 寛司	島根大学教授	
	村田 健三	奈良女子大学助教授	
	河瀬 正利	広島大学講師	
文化庁	田中 哲雄	記念物課文化財主任調査官	
	伊藤 正義	同文化財調査官	
	勝部 昭	島根県教育委員会文化財課課長	
島根県	西山 彰	同文化財係長	
	萩 雅人	同文化財保護主任	
	五味 盛重	文化財建造物技術協会	
協力		北垣 聰一郎	兵庫県立兵庫高教院
事務局・発掘調査		広瀬町教育委員会	文化係
設計・監理		准文化財保存計画協会	

■保存修理事業（平成3・4年度）

項目及び総額	平成3年度	平成4年度	計	調査箇所
発掘等調査費	2,889,120	2,909,003	5,798,123	花ノ欅跡地区、山中御殿跡地区、二ノ丸跡地区、本丸跡地区
事務費	122,880	90,997	213,877	花ノ欅跡地区、山中御殿跡地区、二ノ丸跡地区
計	3,012,000	3,000,000	6,012,000	

■史跡等活用特別事業（平成5～8年度）

事業項目及び総額		平成5年度	平成6年度	平成7年度	平成8年度	計
主たる事業費	歴史的建造物等の復元工事		27,482,967	83,605,287	28,247,055	139,335,329
	造構全体地形模型	29,700,000				29,700,000
	造構露出保護展示施設			19,645,347		19,645,347
	その他必要な諸経費	28,500,000	46,717,013	46,449,366	57,252,945	178,919,324
	発掘等調査費	4,621,970	4,444,638	1,444,494	1,031,176	11,542,278
設 計 管 理		6,500,000	10,500,000	18,500,000	9,500,000	45,000,000
その他	事務費	683,030	857,420	355,540	3,998,320	5,894,310
	計	70,005,000	90,002,058	170,000,034	100,029,496	430,036,588
備考		◆調査模型製作 ステンレス製 (縮尺1/400)	◆石垣修理 山中御殿跡	◆曲輪内整備 化ノ欅跡に休憩 ・管理施設設置	◆石垣修理 三ノ丸跡・二ノ 丸跡	
		◆通路跡復元 奥書院跡から 花ノ欅跡まで	◆入口広場整備 四阿・トイレ 設置		◆通路跡復元 三ノ丸跡から 二ノ丸跡まで	
		◆石垣修理 花ノ欅跡		◆造構露出展示 施設設置 化ノ欅下に盛土 造或土層観察用 覆屋・ステンレス 製		
		◆石垣修理 花ノ欅跡			◆曲輪内整備 二ノ丸跡に四阿 ・管理施設設置	
					◆造構保護 掘切部に岩盤 保護処理	

■平成3・4年度事業

史跡富田城跡整備基本計画策定による短期整備範囲の設定に伴い、各曲輪、通路等遺構残存状況を確認するため以下の箇所について事前発掘調査（トレンチ調査）を実施し、全体の遺構分布状況を把握した。

○調査箇所

- ・千疊平………・櫓跡確認調査
- ・門、堀跡確認調査
- ・石垣跡確認調査
- ・太鼓壇………・櫓跡確認調査
- ・通路跡確認調査
- ・花ノ壇………・通路跡確認調査
- ・橋脚跡確認調査
- ・山中御殿………大手門跡確認調査
- ・二ノ丸、本丸…虎口、門、堀跡確認調査

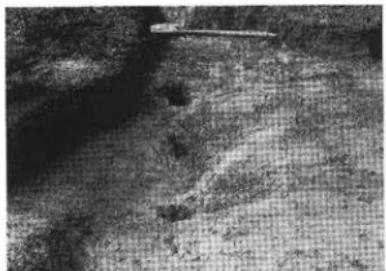
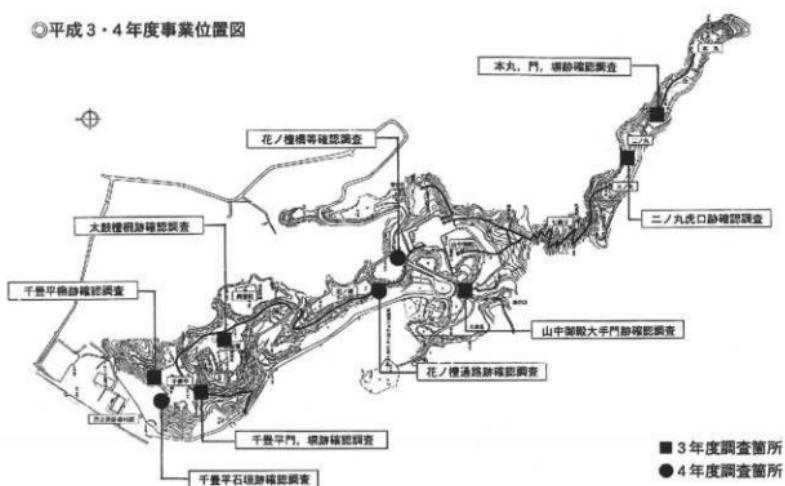
■平成3年度事業費

総事業費		3,012,000	発掘調査	2,889,120
財源	国庫補助金(50%)	1,500,000	その他経費	122,880
	県補助金(25%)	750,000		
	町負担(25%)	762,000		

■平成4年度事業費

総事業費		3,000,000	発掘調査	2,909,003
財源	国庫補助金(50%)	1,500,000	その他経費	90,997
	県補助金(25%)	750,000		
	町負担(25%)	750,000		

◎平成3・4年度事業位置図



千葉平検出柱穴



奥書院～花ノ壇土橋検出状況



山中御殿土丘上部検出遺構



花ノ壇下通路盛土版築跡

■平成5年度事業

平成5年度より「ふるさと歴史の広場」事業の選択を受け、発掘調査は整備計画に則り戦国山城の特徴的な通路、虎口跡等形態の確認調査を行った。

- ・奥書院通路跡：花ノ塙へ向かう丘陵から土壙跡及び幅約2mの土橋痕跡を調査
- ・山中御殿虎口跡：背谷口石垣付近より門、堀等調査、掘立柱建物跡、礎石建物跡を調査
- ・本丸堀、櫓等跡：二ノ丸側曲輪最端部より堀、櫓等跡及び掘立柱建物跡を検出

整備工事としては、破損が著しく崩落の危険性があり早急に着手が求められていた千疊平石垣復旧工事、平成4～5年の発掘調査結果を基に通路跡整備及び通路に面する石垣補修工事を行った。また入口広場整備予定箇所にステンレス板を幾重にも重ね富田城跡の堅固な網張を表現した屋外展示模型の設置を実施した。

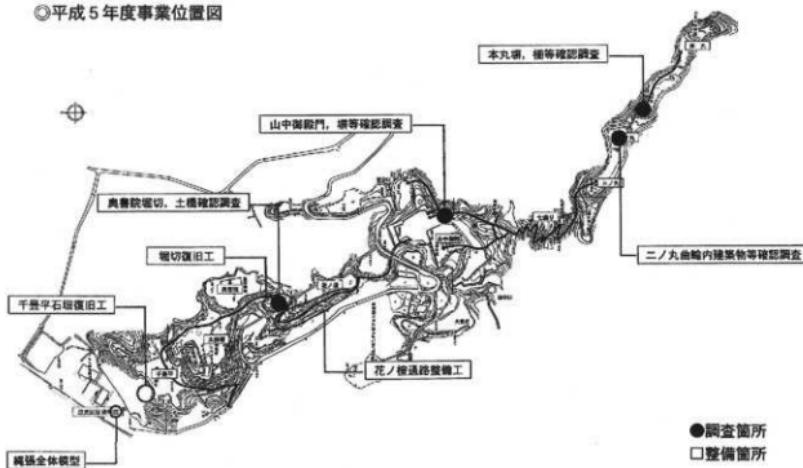
■平成5年度事業費

実 績		事 業 費 内 訳		
総 事 業 費	70,005,000	発 掘 等 調 査 費	4,621,970	
財 源	国庫補助金（50%）	35,000,000	設計管理費（委託）	6,500,000
	県補助金（25%）	17,500,000	整備工事委託費	5,820,000
	町負担（25%）	17,505,000	事 務 費	683,030

■事業工程表

事業項目	5年度	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
発掘等調査													
設計管理													
整備工事													

◎平成5年度事業位置図



花ノ塙下通路跡整備



花ノ塙下通路石垣整備



奥書院～花ノ塙土橋整備



造構全体地形模型設置工

■平成6年度事業

平成6年度「ふるさと歴史の広場」事業における発掘調査は、山中御殿通路、虎口跡及び花ノ壇曲輪内の確認調査が行われた。

- ・山中御殿跡：背谷側土塁石垣から七曲りの間で地山を削り出した通路面と幅30cm、深さ60cmの排水溝が確認された。また、塩谷側土塁石垣より良好な状態で石組みによる相坂階段を検出した。
- ・花ノ壇曲輪跡：曲輪内東側より柱穴、土壙等を検出し、建物跡2棟が明確に確認された。また土壙内遺物より建物跡は16世紀と推定される。

整備工事は山中御殿東南部に残存する土塁石垣と事前調査で確認された相坂階段の補修工事及び前年度に引き続き花ノ壇から山中御殿へと向かう通路整備、曲輪を形造る石垣補修工事を実施した。

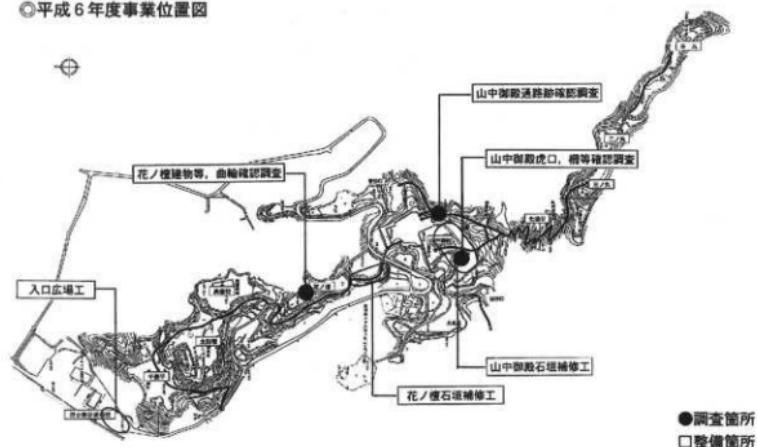
■平成6年度事業費

実 繕		事 業 費 内 訳		
総 事 業 費	90,002,058	発 掘 等 調 査 費	4,444,638	
財 源	国庫補助金（50%）	45,000,000	設計管理費(委託)	10,500,000
	県補助金（25%）	22,500,000	整備工事委託費	74,200,000
	町負担（25%）	22,502,058	事 務 費	857,420

■事業工程表

事業項目	6年度											
	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
発掘等調査							■	■	■	■	■	■
設計管理						■	■	■	■	■	■	■
整備工事						■	■	■	■	■	■	■

◎平成6年度事業位置図



山中御殿／土壘石垣復元



花ノ塙通路跡整備



山中御殿通路／階段跡整備



入口広場

■平成7年度事業

平成7年度「ふるさと歴史の広場」事業における発掘調査は花ノ壇堀切東側に存在する曲輪内確認と七曲り通路跡の調査を実施した。

- ・花ノ壇曲輪跡：曲輪内より据立柱建物跡を検出
- ・七曲り通路跡：菅谷側通路導入部から七曲りに至る通路中腹で石組みで区切られた溝を検出

整備工事は平成6年度花の壇発掘調査で確認された柱穴群に基づき、主屋、侍所（仮称）2棟の建物整備工と縁辺の堀、曲輪導入部跡を低木植栽（柴垣）による整備を行った。整備建物は今後の管理面の必要性から各々休憩、管理施設として活用する方針である。また平成4年度調査で良好な状態で確認された通路造成時の版築土層面を検出し、その検出箇所を利用し露出展示工及び覆屋の設置工事を実施。その他来訪者の見学を円滑にするため指導標設置工事を行った。

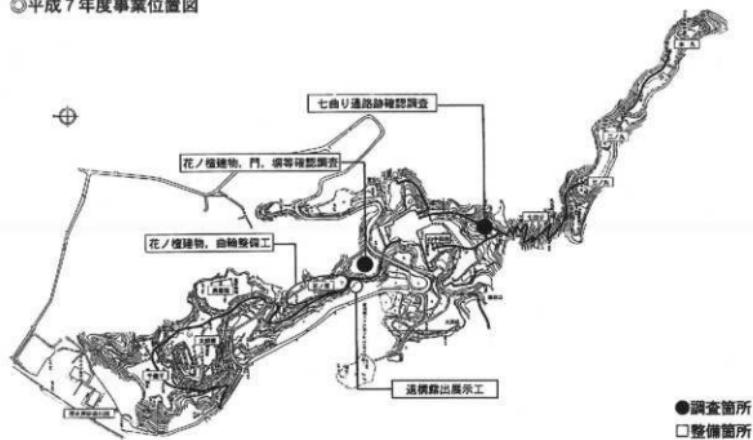
■平成7年度事業費

実 績		事 業 費 内 訳		
総 事 業 費	170,000,034	發 掘 等 調 査 費	1,444,494	
財 源	国庫補助金（50%）	85,000,000	設計管理費（委託）	18,500,000
	県補助金（25%）	42,500,000	整備工事委託費	149,700,000
	町負担（25%）	425,000,034	事務費	3,998,320

■事業工程表

事業項目	7年度											
	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
発掘等調査							■					
設計管理					■	■	■					
整備工事								■	■	■	■	

◎平成7年度事業位置図



花ノ塙復元建物



花ノ塙曲輪内整備



遺構露出展示／通路造成跡



遺構露出展示部分覆屋

■平成8年度事業

平成8年度「ふるさと歴史の広場」事業における発掘調査は、本丸、二ノ丸、三ノ丸跡が位置する月山山頂部の曲輪導入虎口、通路を兼ねた帶曲輪等の確認調査を行った。

- ・本丸跡導入部：平成5年度調査区を拡大し調査したところ、柱穴群を検出し、扉、構等柱列及び門跡、門跡に隣接する矢倉跡を確認。
- ・堀切、二ノ丸導入部：七曲りから三ノ丸帯曲輪へ向かう通路に沿って2～3段からなる石垣と、三ノ丸導入部に虎口、門櫓石を検出

整備工事は発掘調査で検出された二ノ丸、三ノ丸跡への通路、虎口遺構の崩壊を早期に防止するため、石垣補修工事を実施した。その他山頂部資材運搬のための仮設工事、花ノ塙北側園路整備及び各遺構、富田城跡概要等を案内する施設案内板の設置工事を行った。

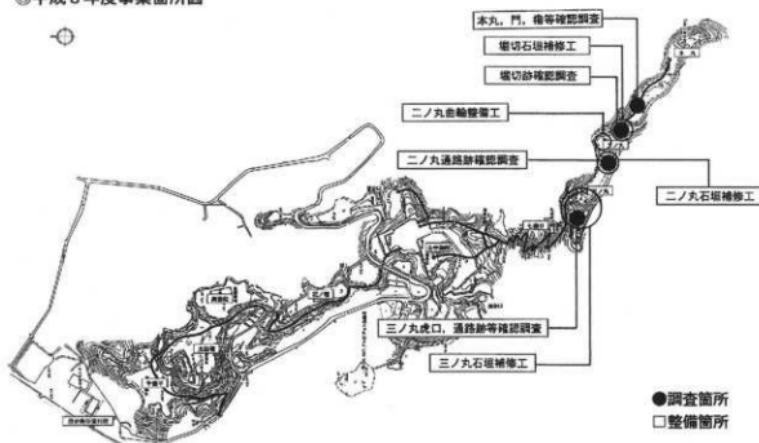
■平成8年度事業費

実 績		事 業 費 内 訳	
総 事 業 費	100,029,496	発 掘 等 調 査 費	1,031,176
財 源	国庫補助金(50%)	50,000,000	設計管理費(委託)
	県補助金(25%)	25,000,000	整備工事委託費
	町負担(25%)	25,029,496	事務費

■事業工程表

事業項目	8年度											
	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
発掘等調査							■	■	■	■	■	
設計管理				■	■	■	■	■	■	■	■	
整備工事					■	■	■	■	■	■	■	

◎平成8年度事業箇所図



二ノ丸堀切及び腰曲輪整備



二ノ丸虎口跡整備



三ノ丸導入口跡整備



三ノ丸下帯曲輪整備

3 章 . 発掘調査概要

3-1. 発掘調査

- ・千疊平
- ・太鼓壇
- ・奥書院
- ・花ノ壇
- ・山中御殿
- ・七曲り
- ・三ノ丸
- ・二ノ丸

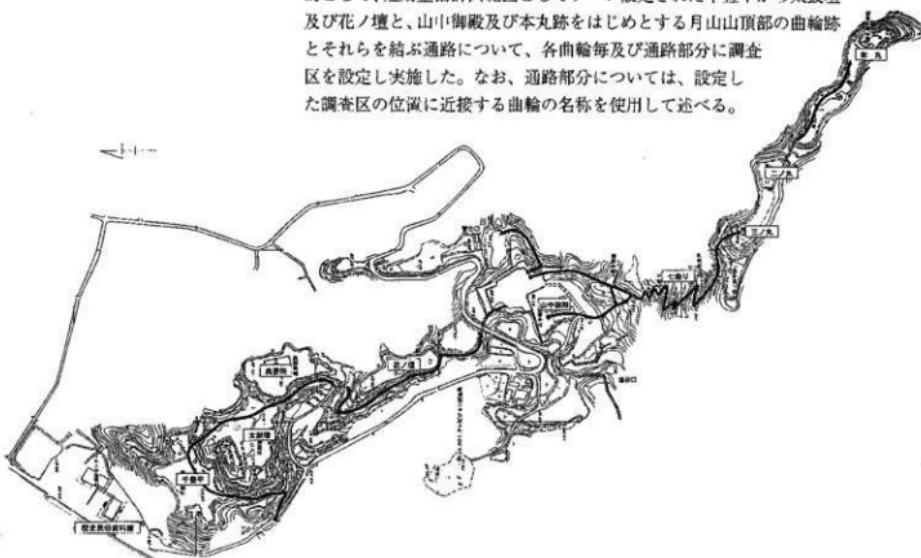
3章. 発掘調査概要

3-1. 発掘調査

史跡富出城跡は、尼子・毛利・堀尾の三氏が居城とした、国内でも最大級の繩張をもつ山城跡である。最後の城主となった堀尾氏が慶長16年（1611）に居城を松江へ移したことから、富出は出雲国の中心的役割を失うと共に廢城となり、これ以降一部が耕作地として利用されるまで、この城に手を加えたという記録や伝承がないことから、現在残る繩張の形状は主に廢城となった1611年以前に形成されたものと考えられる。

この富田城跡の繩張を構成している遺構は様々なものがあり、主要なもの一つとして、本丸・二ノ丸・三ノ丸や山中御殿跡等に代表される曲輪跡があるが、最も重要な要素として通路や虎口の形態がある。広い範囲に広がっている繩張の中で、御子守口・昔谷口・塙谷口等に代表されるような谷間を利用して主要な通路を中心とする各曲輪への進入は決して直線的なものではなく、曲輪の直前で大きく迂回して脇から入るような虎口の形態を持っている。また、それぞれの曲輪を結ぶ通路は、堀切や土橋及び帶曲輪等を巧みに利用しながら各曲輪への導入を計っている。

今回の発掘調査では、整備事業のテーマでもあるこの広大な繩張の内部を繋ぐ導線としての通路の復旧のため、想定される通路部分やそれに付随する虎口及び曲輪内遺構の残存状況や破損状況を確認することを目的として、短期整備計画範囲としてゾーン設定された千骨平から太鼓壇及び花ノ壇と、山中御殿及び本丸跡をはじめとする月山山頂部の曲輪跡とそれらを結ぶ通路について、各曲輪毎及び通路部分に調査区を設定し実施した。なお、通路部分については、設定した調査区の位置に近接する曲輪の名称を使用して述べる。

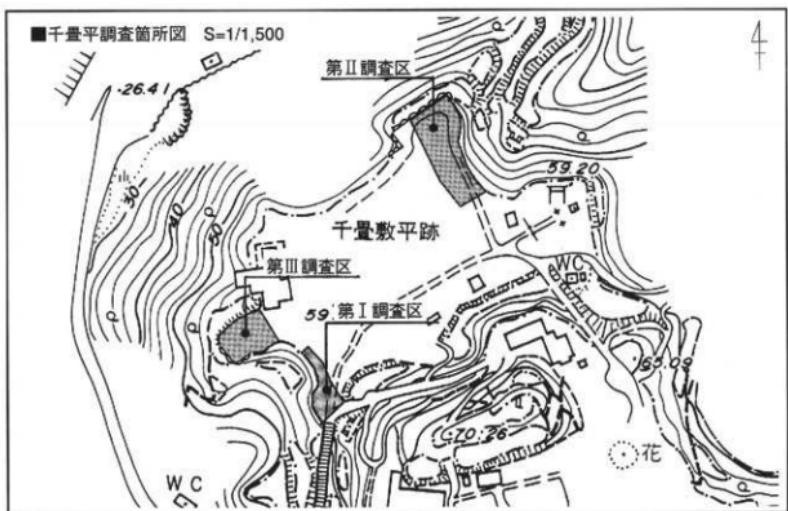


■千畳平（平成3～4年度）

1) 位置

この曲輪は、富田城を構成する曲輪群の外辺部に展開しているもので、月山中腹の山中御殿跡を要として北西方向へ延びる尾根の先端に位置する通称「千畳平」と呼ばれる曲輪であり、その名の通りこの尾根上に残る多数の曲輪の中でもかなり広い平地面積を有している。

調査区は、この曲輪への現在の上り口の3箇所に設定したが、第Ⅲ調査区からは何も検出していない。



2) 遺構

[第Ⅰ調査区]

この調査区は、現在この曲輪への進入路として利用している通路を上りきった部分に設定したもので、地表下約30～40cmの深さより遺構面と考えられる花崗岩の風化層からなる地層を確認し、そこから11個の柱穴を検出した。これらは、平面やや鋭角なL字状に並び、曲輪縁辺部に添うように北西から南東を経た後、若干蛇行しながら東へ延びている。

まず、北西から南東間は8つの柱穴がほぼ一列に並んでいるが、南東側と北西側では柱穴の間隔に差が見られ、南東側の柱穴が概ね80cm間隔であるのに対し、北西側は1.7～2.0m間隔となっている。また南東から延びるものは、1.6m間隔で多少湾曲しながら3つの柱穴が並んでいるが、東側の2つは南東側のものに比べて平面規模が大きくなっている。これらのこと考慮すると、それぞれが別の性格をもつような感があるが、検出した位置からして曲輪縁辺部を囲む柵のようなものではないかと思われる。

〔第Ⅱ調査区〕

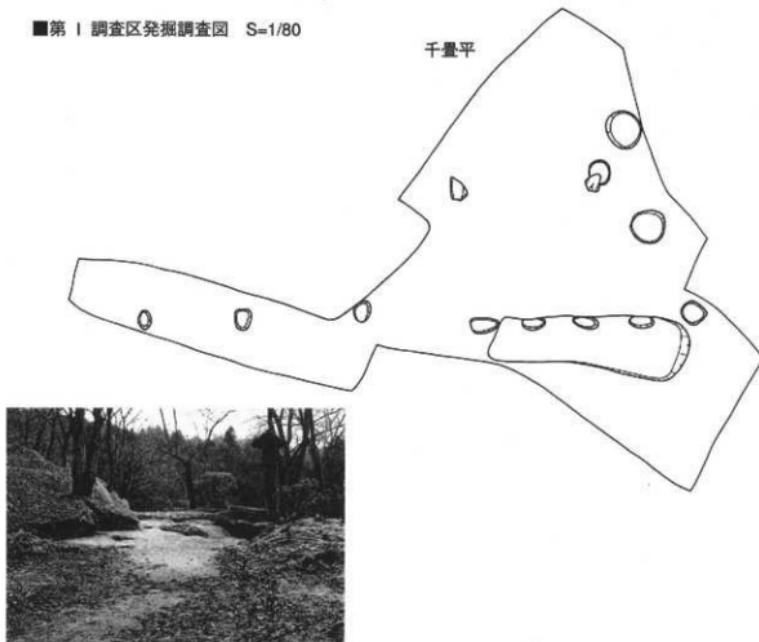
千畳平の北側縁辺部に設定した調査区であり、地表下約20cm程度から多数の柱穴及び溝や土壤を検出している。これらは、全て遺構面と考えられる花崗岩の風化層に掘り込まれ、主に調査区南側に広がっており、端へ行くほど遺構は存在しなくなるようである。

柱穴は多数検出され、拳大の川石を伴うものもあるが、規格性は見られない。大きさは、平面径10~30cm、深さ20~30cm程度のものが主体である。

溝は、調査区南側を蛇行しながら東西方向に延びており、検出規模は長さ約8m、幅約30cm、深さ20~30cm程度のもので、中央付近で北へ延びる深さ約50cmの溝と切り合っている。

土壤は3基を検出し、いずれも平面方形又は長方形状を呈し、1基は溝と切り合っている。まず、方形状のものは、一辺の長さ及び深さとも約40cm程度を測り、ほぼ完形の土師質土器皿を伴うが、あるいは柱穴であったとも考えられる。この土壤から北東側の調査区中央付近で検出したものは、平面規模が約40×50cm、深さ約30cm程度となっている。溝と切り合う土壤は、平面規模が約1.2m×40cm、深さ約50cmを測るものである。

■第Ⅰ調査区発掘調査図 S=1/80



第Ⅰ調査区近景



第 II 調査区方形土壙



3) 遺物

今回出土した遺物は、遺構面を覆っていたのが表土層のみであるため、大半は表土層中から採取され、その中には現代のものも含まれており、遺構に伴うものとしては完形に近いものを含む土師質土器皿が3点見られるのみである。このような状況の中、表土層より出土した現代のものを除く遺物の総数は25点であり、そのうち土師質土器皿の破片が2点出土しただけの第 III 調査区を除く第 I 及び第 II 調査区についてみると、どちらも土師質土器を除く遺物の組成が中国製の白磁・染付と国内産の備前焼を中心に構成されているが、いずれも小片ばかりである。これらの状況は、小片のために判別し難い面はあるものの、中国製品は全体の4割を占め、国内製品は2割程度となっている。

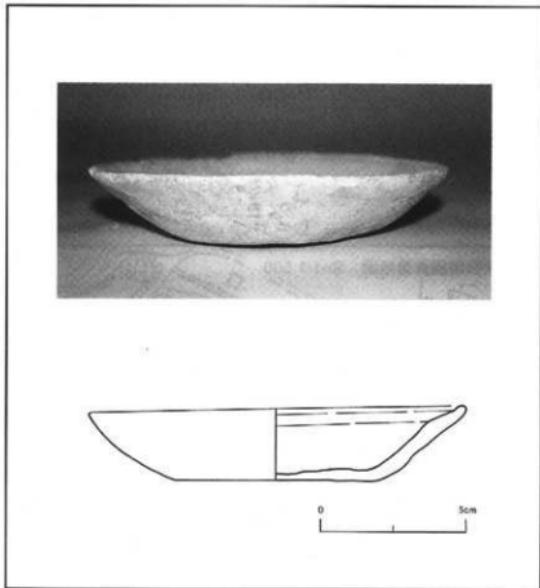
4) まとめ

この千疊平地区は、近年公園として利用されていたため、調査着手前より遺構及び遺構面の搅乱が懸念されていたが、今回の調査によって検出された遺構の状況を見る限りでは予想していたほどの影響は見られなかった。しかし、遺物については、表土層中の遺物の在り方や遺構面から採集された遺物がいずれも小片ばかりであったことを考えると、表土層から遺構面にまで及ぶ範囲で何らかの大きな搅乱が加わっている可能性は十分考えられる。それは、今回設定した調査区の位置が、いずれも

搅乱の影響が少ないと見られた曲輪縁辺部付近にも係わらずこのような状況が見られたことは、曲輪全体が同じ状況になっていることを予想させ、あるいは曲輪中央付近では遺構面にまで及んでいる可能性も考えられる。

次に、今回確認した遺構についてだが、調査区の位置関係や遺構面上の覆土が表土のみであったことから、それぞれの調査区から検出した遺構の時期的な相関関係は不明確な点が多い。また、遺物にしても数量的に乏しいうえ、大半が表土層から採集されているうえに搅乱を受けている様相が何えたため、はっきりしない点が多く、伊万里焼が含まれていないことを考慮しても16世紀の後半より遡るようなものではないようである。

■出土遺物



方形土壙出土土師質土器

■太鼓壇（平成3～4年度）

1) 位置

この曲輪は、千畳平より7mほど高い南東側（月山側）に連続して位置するもので、城があった当時に刻を告げる太鼓が据えられていたとの伝承があることから、通称「太鼓壇」と呼ばれる曲輪である。

2) 遺構

調査区は、この曲輪から富田城本丸方向へ向かう2つの通路の分岐点付近縁辺部（第I調査区）と、千畳平から至る導入部（第II調査区）に設定し、どちらも地表下30～50cmより遺構面と思われる花崗岩の風化層からなる地山を確認したが、遺構は検出できなかった。

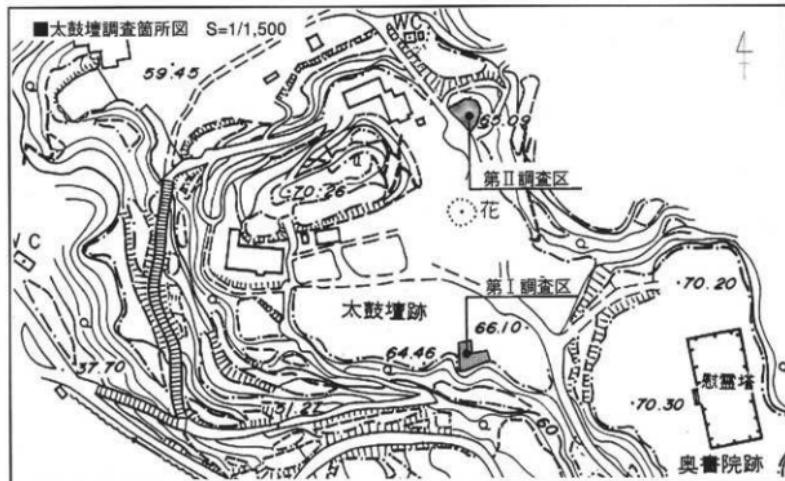
3) 遺物

先述のように、遺構が確認されなかつたうえ第II調査区から何も出土していないため、採集した量も少なく、土師質土器片を中心に総数6点が出土している。土師質土器以外では、中国製の白磁と染付が出土しているが、いずれも器形もわからぬような小片ばかりである。

4) まとめ

この太鼓壇地区は近年公園として親しまれており、千畳平と同様に調査着手前より遺構及び遺構面の擾乱が懸念されていた。また、設定した調査区の位置が曲輪の縁辺部であったこともあり、遺構面と考えられる地層は確認できたものの、遺構を検出することはできず、採集された遺物も極めて少量であった。

なお、今回の調査区は、曲輪のほんの一部分に過ぎず、未調査部分が多く残っているため、今後の調査に期待したい。

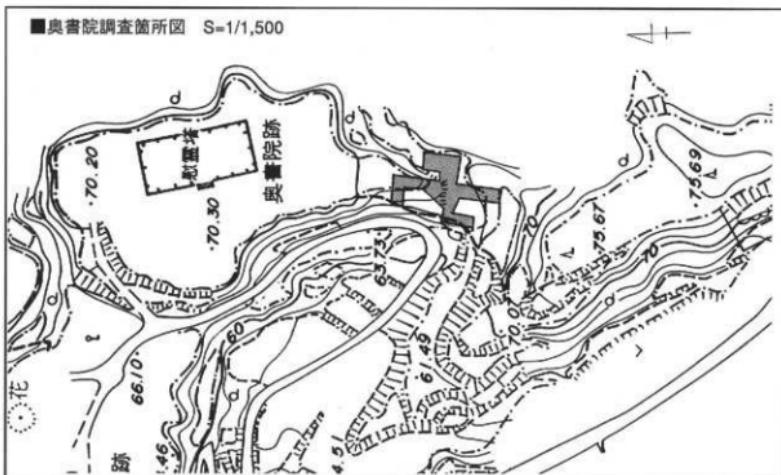


■奥書院（平成5年度）

1) 位置

千畳平及び太鼓壇の南東側（富田城本丸側）に位置し、太鼓壇より約4m程度高く、千畳平から太鼓壇を経てこの平地まで、階段状に連続して続く曲輪群の最上部に位置する、通称「奥書院」と呼ばれる曲輪であり、太鼓壇より東を経た後、南へ迂回しながら進んで至る曲輪である。

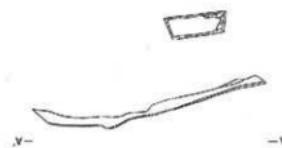
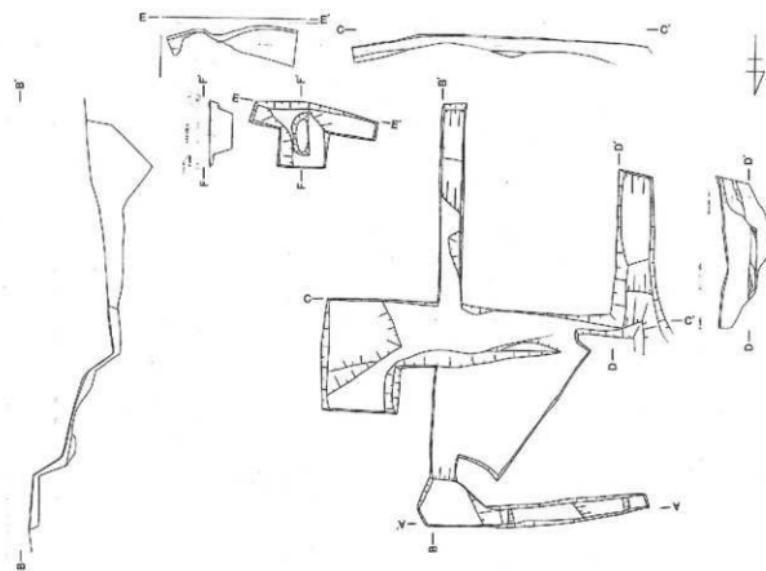
調査区は、この奥書院と呼ばれる曲輪から、さらに南東側（本丸側）に配されている曲輪とを繋ぐ通路跡と想定される部分に設定している。



2) 遺構

この調査区は、奥書院の南東側に位置し、奥書院からさらに、その南東側に展開している曲輪とを結ぶ、通路跡の存在が予想される土橋のような形状を残す部分に設定したものであり、地表下およそ20~30cmの深さで幅約2mの通路跡と思われる遺構を検出した。この遺構は、固く締まった花崗岩の風化層を断面台形状に加工して造成されており、一部土橋のような形状を見せながら奥書院の南側からほぼまっすぐに延びた後、奥書院の南東側丘陵に配される曲輪の先端部で西へ向きを変え、南東側の丘陵一帯に配される曲輪群の、西側縁辺部分を巡るように、本丸方向へ続いているようである。なお、この通路部分は、全体的に黄褐色土で覆われており、意図的に埋め込まれたような様相が窺える。また、南東側曲輪群付近の通路は、土を何層にも盛って造成している状況も確認できる。

■奥書院土橋調査図





通路状遺構盛土状況



3) 遺物

この調査区からは、土師質土器の皿の破片を中心に、極めて少量の遺物しか採集されず、他のものとしても、中国製の染付皿の破片が1点見られるのみであり、これらを合わせても、総数4点しか出土していない。また、これらは全て小片ばかりであり、いずれも器形のわかるようなものは見られず、伊万里焼・唐津焼も含まれていない。

なお、今回出土した遺物は、全て黄褐色土層中より出土したものであり、表土層及びそれ以外からは、何も採集されていない。

4) まとめ

この奥書院地区も、先に述べた千疊平や太鼓壇と同様に、古くから公園として親しまれていたところだが、今回調査区を設定したのは、その平地部分ではなく、曲輪南東側の小高い尾根状となった部分に設定したので、当初より土橋のような通路の存在が予想された箇所である。調査の結果、幅約2mの通路跡と思われる遺構を検出し、それに伴う遺物も何点か採集されてはいるが、上記のとおり数量的にはかなり少ないものであり、これは検出した遺構の性格上、止むを得ないものと思われる。

■花ノ壇

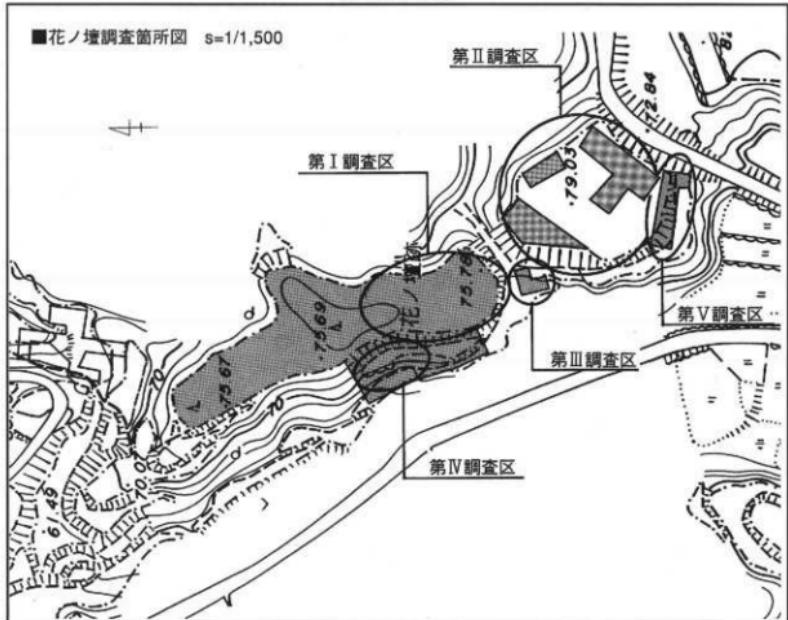
1) 位置

富田城中腹の、周囲を石垣で囲まれた山中御殿跡から北西に延びる丘陵上に位置し、奥書院の南東側にあたる通称「花ノ壇」と呼ばれる曲輪である。この曲輪は、南東から北西方向へ細長く延びるものだが、曲輪の中央付近で堀切によって北西側と南東側の2つの平坦地に区分され、さらに昭和になって山中御殿の石垣付近が道路建設によって堀切状に削り取られているため、現在は3つの平坦地から構成される曲輪となっている。また、堀切によって分けられている2つの平坦地は、堀切を挟んだ南東側が北西側より現状で約3m程度高い位置にある。

なお、奥書院より延びてきた通路は、この曲輪の北西端部を西から南へと大きく迂回した後、曲輪の西側斜面中腹を若干蛇行しながら本丸方向へと進んでいくが、途中曲輪を分かれている堀切付近で、3つに分かれている曲輪の最も北西側に位置する平坦面へ至る通路が分岐している。この通路は、分岐してから曲輪の西側斜面を北西方向に進んだ後、平坦地のすぐ手前でまた本丸方向へ鋭角的に向きを変えて、平坦面へと至るようになっていたようで、これによって曲輪斜面が段状に加工されていたことが窺える。また、この通路が大きく方向転換を見せる辺りの斜面には、以前よりわずかだが、石垣の存在が知られていた。しかし、調査の結果この石垣が山中御殿のように曲輪周囲を巡るものではないことが確認されたことから、通路を確保あるいは補強するために設けられていくと考えられる。

また、この3つの平坦地のいずれも、昭和30年代頃までは畠として利用されていたとのことである。

この花ノ壇地区における調査区は、堀切と道路によって3つに分かれる平坦面の最も北西側のもの（第Ⅰ調査区）と中央部分のもの（第Ⅱ調査区）の2つの平坦部分及びこの2つの平坦地を区切る堀切部分（第Ⅲ調査区）と第Ⅰ調査区を設定した平坦面の西側斜面（第Ⅳ調査区）及び第Ⅱ調査区の西側斜面（第Ⅴ調査区）の5つの調査区を設定している。



2) 遺構

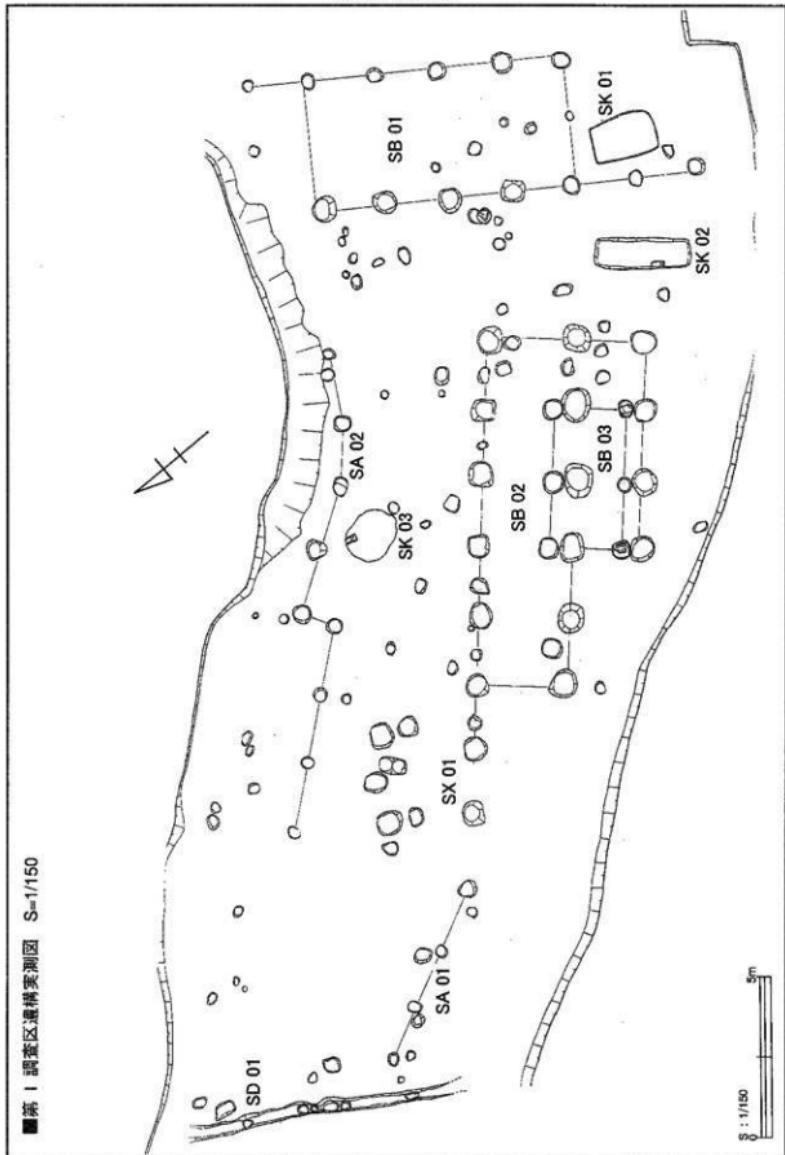
[第Ⅰ調査区]

この調査区は、現在3つに分かれている花ノ塙の最も北西側に位置する平坦地であり、3つの中で最も広い平地面積を有し、曲輪中央付近の西側斜面には、本丸方向に向かう通路とその縁辺及び斜面を固める石垣も残っていたが、調査着手前はほとんど雑木林に近いような山林となっていたため、まずこれらの伐採から着手し、概ね表土下20~30cm程度の深さで遺構面と考えられる花崗岩の風化層からなる地山を確認した。調査は、曲輪の平地部分ほぼ全域について実施しているが、遺構はこの部分の南東側からしか検出されず、残りの3分の2に相当する平地部分からは何も確認していない。

また、平坦面の東西両縁辺部付近は、後世の搅乱によるものか、遺構面がかなり破壊をうけているようである。

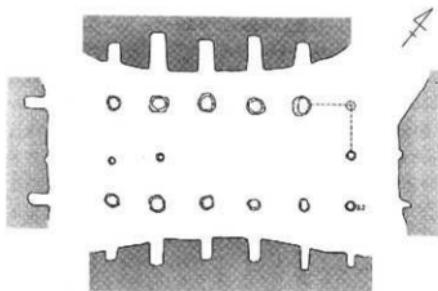
検出した遺構は、建物跡3(SB01・02・03)、門跡1(SX01)、塀跡3(SA01・02)、溝跡1(SD01)、土壙3(SK01・02・03)である。以下は、検出した遺構毎に述べていくものとする。

3章 発掘調査概要



■SB01 調査区内の最も南東側に位置し、曲輪の平地部分を横断するようにはば東西方向へ長い掘立柱による建物跡であるが、建物跡の北東隅に位置する柱穴については、搅乱による破壊によって、痕跡程度にしか確認していない。検出した建物の規模は、東西9.7m、南北3.9mの大きさであり、東西間が5間、南北間が2間となっている。柱穴の間隔は、桁行が東から約1.9m + 2.0m + 1.9m + 2.0m + 1.9mを測るが、梁行については東側と西側で若干様相が異なっており、東側のものは北から約2.0m + 2.0mを測り、西側は北から2.1m + 1.8mの間隔となっている。建物跡を構成している柱穴の径は、概ね30cmから80cmを測り、深さも約50cmから1.5mと開きがあるが、これは東西端部に位置する4つの柱穴のいずれもが他のものと比較して小振りで浅くなっているためである。また、建物跡の範囲内南西隅隅付近の遺構面には、長径約1m、短径約60cmの平面歪んだ梢円形状の範囲内に焼土が堆積しており、さらに建物跡の北側桁行を構成している柱穴列の西側延長線上には、建物跡から延びていたと思われる堀跡らしき柱穴が2つ並んでいる。

■ SB01 調査図



第1調査区

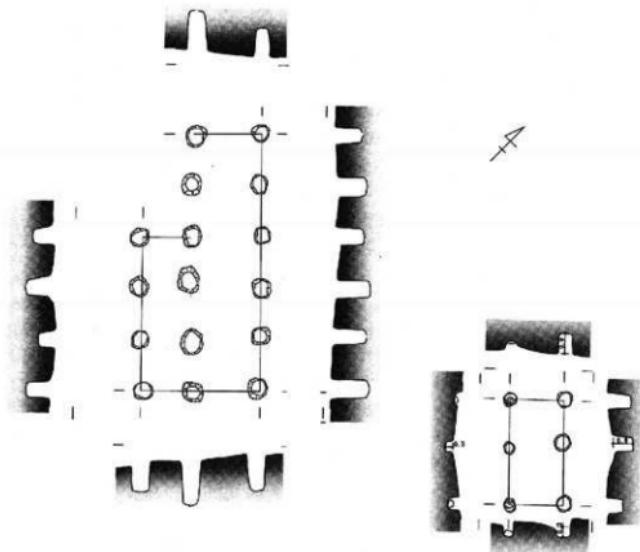


SB01

■SB02(建物跡) SB01の北西側で検出した、南北に長い掘立柱による建物跡であり、全体的な柱穴の配置から見ると梁間隔が一定でなく、平面鍵形状となっているものである。検出規模は、最も大きな部分で見ると東西4.9m、南北約11mの大きさで、東西間が2間、南北間が5間ではあるが、建物跡の北西側端部から南東側へ桁行2間分までは、梁間隔が東側の1間しかなく、そこから南東側は梁間隔が西側へ1間増えて2間となっている。建物跡の柱間隔を最も規模の大きい部分で見ると、桁行が北から約2.1m + 2.2m + 2.3m + 2.0m + 2.1mとなっており、梁行は東から約2.8m + 2.1mと若干西側の間隔が狭くなっている。建物跡を構成している柱穴の平面径は、概ね70cmから80cmと比較的まとまっているが、深さについては約90cmから1.6mとかなり差が見られる。これは、棟を支えていたと思われる建物跡の南東側中央を北西から南東へ延びている4つの柱穴がいずれもおよそ1.8m前後の深さとなっているためである。

■SB03(建物跡) SB02の範囲内中央付近に位置する掘立柱構造の建物跡であり、建物跡を構成する全ての柱穴がSB02のものと隣接あるいは切り合い関係を持ち、SB02と平行に並んでいる。検出した規模は、東西約2.2m、南北4.3mの大きさで、東西間が1間、南北間が2間となっており、桁行の柱間隔が北から約2.0m + 2.3mを測り、梁行の間隔は2.2mである。建物跡を構成している柱穴の平面径は、約60cmから70cmとほぼまとまっており、深さは約30cmから80cmとばらつきはあるものの、浅いものの中には人頭大程度の根石を持つものもある。また、建物跡を構成する中での切り合い関係にある、SB02を構成している柱穴と比較してみると、全体的に規模としては小さなことで構成されている。

■ SB02,SB03

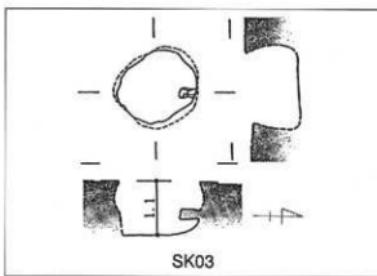
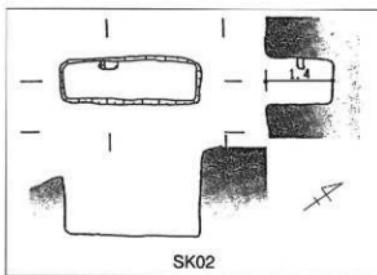
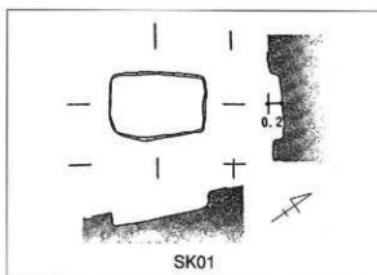
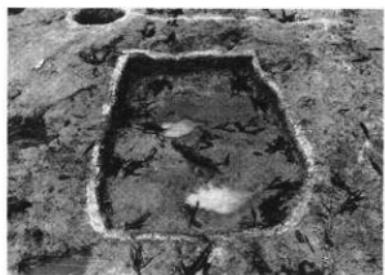


SB02, SB03

■ SX01（門跡） SB02 の北西側に隣接するように位置し、西から東へ向かって開く平面八の字状に配された4つの柱穴によって構成される、この平坦地への入口部分に相当すると思われるものである。この遺構は、先述したように曲輪西側斜面の屈曲した通路の延長上にあり、曲輪への導入口と考えられる。遺構の平面規模は、北西側を構成しているものが東西に約1.7mの間隔であり、南東側を構成するものは約2.2mとなっている。また、通路に相当する北西側と南東側のそれぞれ対応する柱穴の間隔は、西側が約2.0m、東側で約2.8mを測り、平面的には「八」の字形の構造である。この遺構を構成する柱穴の規模は、平面径が約60cmから80cm、深さが約80cmから1m程度となっている。なお、西側の2つの柱穴は、掘立柱建物跡（SB02）の東側平行部分を構成している柱穴列の延長線上に位置している。

■ SA01 SX01 の北側に位置し、4つの柱穴で構成される入口跡（SX01）の北西隅に位置する柱穴を起点として、曲輪の西側縁辺部に添うよう、若干蛇行しながら北西方向へ延びているが、曲輪縁辺部付近の遺構面は全体的に擾乱を受けているため、北西方向へ行くほど遺構が破壊されており、検出できたものについても、上部が消失していたり痕跡程度にしか確認できなかったものもある。検出した全体の長さは、入口跡を構成しているものを除けば、およそ17mであり、合計9つの柱穴を確認している。柱穴の間隔は、南から約2.3m + 2.1m + 2.1m + 2.1m + 2.1m + 2.1m + 2.1mを測り、一部を除けば比較的まとまっている。柱穴の規模は、破壊を受けているためはっきりしない部分はあるが、平面径が約40cmから60cmを測り、深さは概ね60cm程度のものであったと思われる。

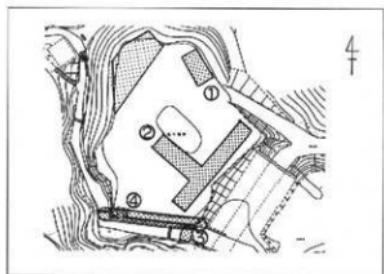
■ SA02（堀） 掘立柱建物跡（SB02）及び入口跡（SX01）の東側に位置し、曲輪の東側縁辺部に添うようなかたちで、全体に湾曲しながらほぼ南北方向へ延びるもので、この遺構の中央付近北側寄りではクランク状に折れ曲がっている部分がある。また、この遺構の南側には掘立柱建物跡の南側（SB01）があるが、遺構面そのものが擾乱によって破壊されていることもあり、建物跡の南側及び周辺から柱穴は確認できず、検出した柱穴の中にも全容がはっきり確認できないものもある。柱穴は、合計11個を確認し、全体の長さはクランク状の部分を含めて約19mであり、柱穴の間隔は南から約2.1m + 2.2m + 1.6m + 2.0m + 2.1m + 2.0m + 1.1m + 2.2m + 2.0m + 2.0mとなっている。なお、遺構を構成している柱穴の規模は、一部はっきりしない部分があるものの、平面径が概ね40cmから60cm前後となっており、深さは約40cmから60cm程度のものである。



- SD01 南北に長い曲輪の中央付近南側より検出し、堀跡（SA01）の東側に位置するもので、平地部分を東西に横断するように検出した溝である。全体的に、ゆるやかに蛇行しながら東西方向に延びるもので、幅も一定ではなく、両端部は曲輪縁辺部の擾乱に伴う破壊によるものか、はっきりとは確認していない。また、この溝は、長さが約7m、幅は約30cmから50cmを測り、深さは約40cmから50cm程度の規模である。なお、この曲輪上部から検出された遺構は、全てこの溝から南東側に位置しており、北西側の平地からは、先述のように一切遺構は確認されていない。
- SK01 調査区南東側の掘立柱建物跡（SB01）の南西側に位置し、建物跡に隣接するように検出した土壙である。平面形は、やや歪んだ東西方向に長い長方形状を呈しており、西側が若干膨らんでいるようである。規模は、長径が約2m、短径が約1.4mと大きなものだが、深さはおよそ20cm程度しかなく、平面の大きさに対し、深さがほとんどない。後世の擾乱が激しく、不明な部分が多いのだが、あるいは上層にあった遺構面から掘り込まれたものかも知れない。
- SK02（カワヤ） SK01の北側にあり、掘立柱建物跡（SB02）の南側に位置し、もう一つの掘立柱建物跡（SB01）の北西側より検出した土壙である。平面形は東西方向に細長い、比較的きれいな長方形を呈しており、内部に人頭大程度の石を伴っている。規模は、長径が約3m・短径が約1mを測り、深さは約40cm程度で、内部がきれいな方形状となるように掘り込まれている。
- SK03 掘立柱建物跡（SB02）の東側に位置し、堀跡（SA02）の西側に隣接するように検出した土壙である。平面形は橢円形を呈し、内部に拳大程度の石を伴っている。またこの土壙は、上部よりも底部の平面径が大きい、袋状の構造となっている。規模は、上部の長径が約1.6m、短径が約1.3mで、底部の長径が約1.6m、短径が約1.5mを測り、深さは約1.1mとなっている。なお、底部は南東方向へ向かって傾斜しており、全体の断面形状も台形状を呈している。

[第II調査区]

この調査区は、現在3つに分かれている花ノ塙の中央に位置する平坦地であり、北西側は堀切によって区切れられ、南東側は道路によって平地と区切られている。ここは、調査着手前は竹林となっており、しかも竹以外の雑木等も繁茂して藪のようになっていたため、これらの伐採から着手し、表土下約30cmから40cmの深さで、遺構面と考えられる花崗岩の風化層からなる地山を確認した。しかし、竹や樹木等の根による搅乱が激しく、遺構面が全体的にかなり破壊されていたため、この平地部分の大半について調査を実施してはいるものの、遺構は全くと言っていいほど確認できず、わずかに土壤及び柱穴らしきものを2~3検出したのみだが、これも搅乱の影響が強く、あまり明確なものではない。



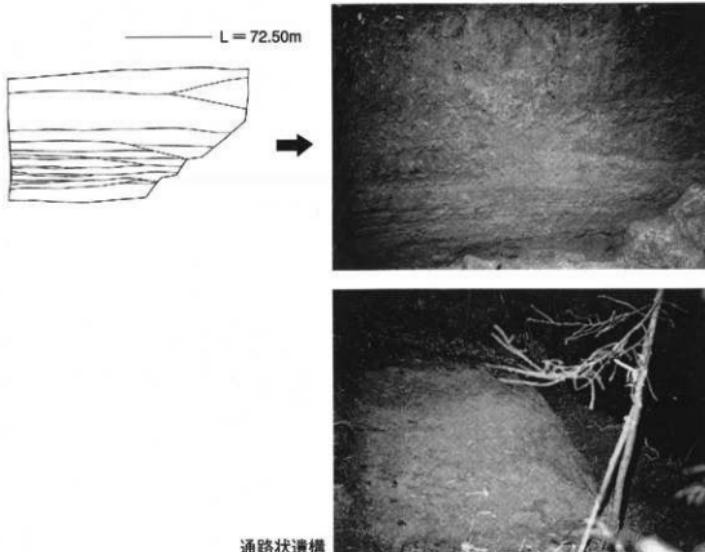
① トレンチ



④ トレンチ石垣

[第 III 調査区]

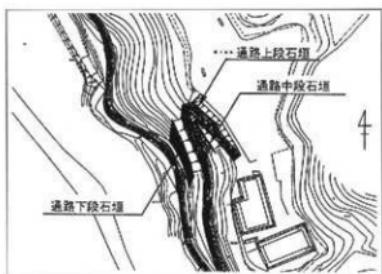
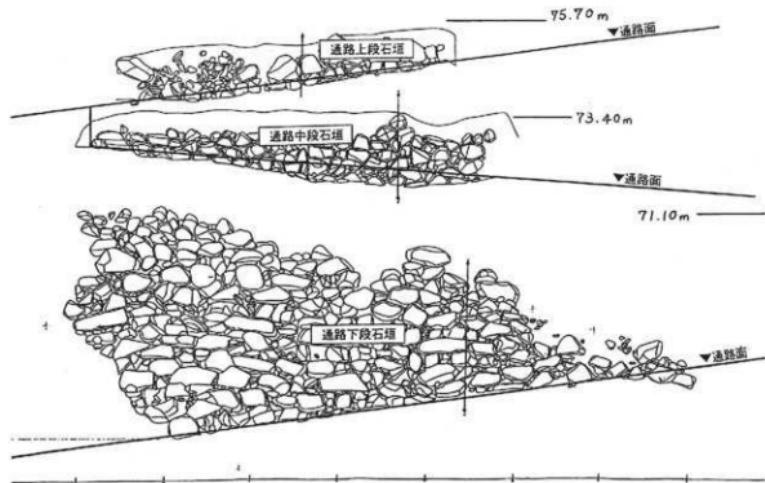
この調査区は、3つに分かれる花ノ塙の最も北西側に位置する第 I 調査区を設定した平地と、中央部分に位置する第 II 調査区を設定した平地を区切る掘切部分の、これら2つの平地の西側斜面を本丸方向へ延びる通路部分に設けたものである。ここも、調査着手前には雜木林のようになっており、これら樹木をできるだけ避けるようにして調査区を設定し、地表下約20cmから40cm程度の深さから、通路跡と思われる固く締まった地層を検出した。そして、さらにこの通路部分の構造を確認するため、トレーナー状に掘り込んだところ、約2m程度の深さで、地山である花崗岩の風化層を検出した。この地山は、花ノ塙の西側斜面が2段のテラスを持つような階段状に加工されている。通路の構造は、地山である花崗岩の風化層をベースとして、そこから上層へ向かって粘土層や真砂を突き固めた層等、様々な土層が地山部分からおよそ1.6mの高さにまで細かく何層にも分かれた版築状に造成がなされている。これは、通路部分の水捌けと、通路西側の斜面を固めるためになされているのではないかと思われる。また、この通路跡は、何度も埋め立てを行い、その都度多少姿を変えてはいるものの、繰り返し利用がなされていたようだが、最も初期の時点と考えられるものは、平地側の通路面が急激に傾斜し、平地側の斜面と通路との間に、深さ約20cm・上部幅約1m・底部幅約20cmの溝の存在していた可能性も考えられる。



[第Ⅳ調査区]

この地区は調査着手以前より通路跡の存在が知られていたため、樹木の伐採・整理を実施したところ、概ね通路形態が明らかになった。奥書院より延びてきた通路は、この曲輪の北西突端部を西から南へと大きく迂回した後、曲輪の西側斜面中腹を若干蛇行しながら本丸方向へと進んでいくが、途中曲輪を分けている堀切付近で、3つに分かれている曲輪の最も北西側に位置する平坦面へ至る通路が分岐している。この通路は、分岐してから曲輪の西側斜面を北西方向に進んだ後、平坦地のすぐ手前でまた本丸方向へ鋭角的に向きを変えて、平坦面へと至るようになっていたようで、これによって曲輪斜面が階段状に加工されていたことが窺える。また、この通路が大きく方向転換を見せる辺りの斜面には、以前よりわずかだが、石垣の存在が知られていたが、この石垣が山中御殿のように曲輪周囲を巡るものではないことから、通路を確保あるいは補強するために設けられているような印象を受ける。3つに分かれている花ノ壇の最も北西側に位置する平坦地の、西側斜面に設定した調査区であり、この斜面を本丸方向へ延びる通路の東側には、調査着手以前よりわずかだが石垣の存在が知られ、整備に併せて調査を実施した箇所である。当初より露出していた石垣の範囲は、長さ約9m、高さ約2mであったが、整備のためにその表面及び周囲の土砂を取り除いた時点で広がっていることが確認され、結局長さ約15m、高さ約6mの範囲に残っていることが確認された。また、この石垣上部には、本丸方向へ延びる通路から分岐し、曲輪の平地部分へと、斜面を上りながら「く」の字状に折れ曲がる通路が走っている。この通路は分岐してから一旦奥書院方向へ向かって斜面を上り、またさらに平地へ至る手前で本丸方向へ大きく折れ曲がってから曲輪上部へと繋がっているが、この「く」の字状に折れ曲がる通路それぞれの東側斜面にも石垣が検出され、合計3段の段状石垣となる。まず、最も上部より検出した、平地部分へ上がり切る通路の東側斜面から確認された石垣は、検出長約8m、高さ約1mであり、中段に位置する「く」の字に折れ曲がる手前の通路の東側斜面のものは、長さ約9.5m、高さ約1.5mを検出している。なお、これら3つの石垣に使用されている石は、所々川石も見られるが、裏込と思われる10cm程度のものを除けば、概ね50cmから70cm程度の大きさの削石を主体としており、中には1.2mもの大きなものも見られる。

■第IV 調査区遺構実測図



通路下段石垣



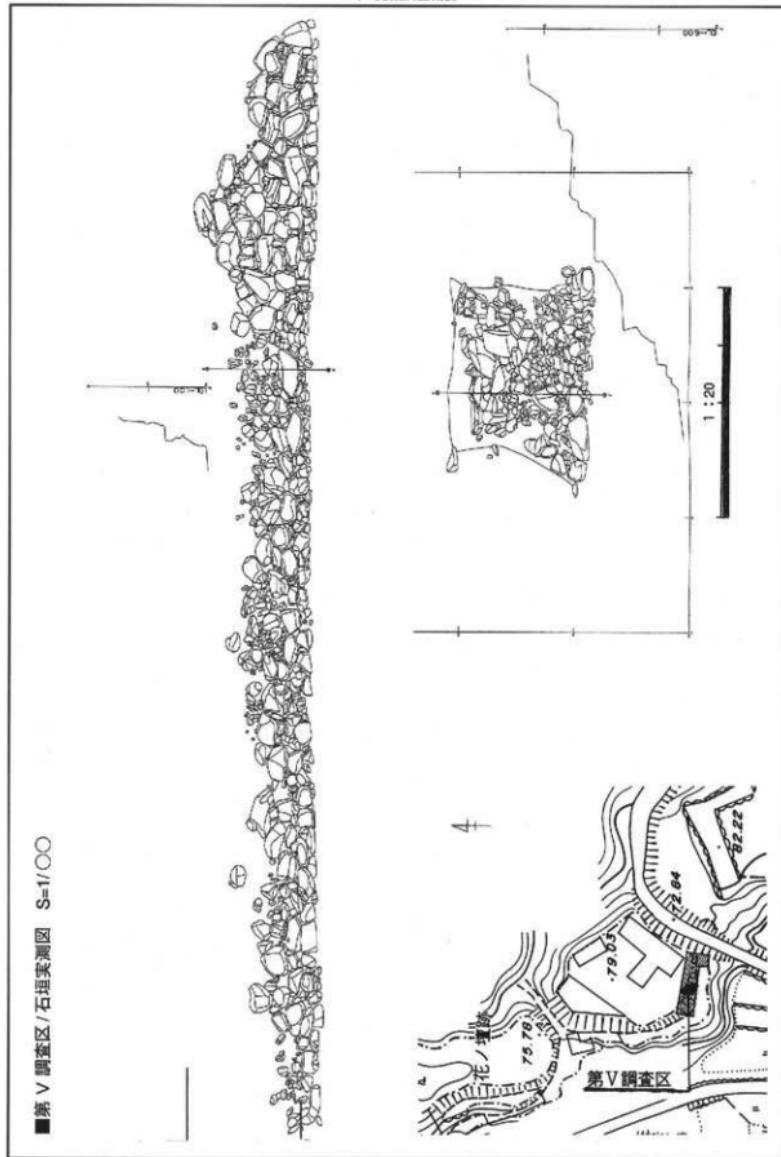
通路上段及び中段石垣

[第V 調査区]

3つに区分けされている花ノ塙の中央に位置し、第IV調査区を設定した平坦地の西から南西側を巡る斜面に設定した調査区であり、整備に併せて調査を実施した部分である。斜面の西側端部やや北寄り付近から南西側にかけて続く、全長約25m、高さ約2mの石垣を検出した。石垣は竹等の根による搅乱の影響から激しく破壊されており、かなり崩壊が進んでいるものの、検出した状況からすると、山中御殿跡方向へさらに続いているようである。また、平地の南西隅付近にあたる、南西側斜面石垣の西端付近には、約2.5mの幅をもつ5段の石積階段が検出された。なお、石積階段で分けられる石垣のそれぞれの長さは、西側が約5mを測り、南西側が石積階段部分を含めて約20mを測るものである。裏込と考えられる10cm程度のものを除くと、ほぼ50cmから60cm程度の割石を主体に構築されており、中には1m大のものも利用されている。



第V 調査区石垣・石段検出状況



3) 遺物

この地区は、平地部分が総じて、一時期耕作地として利用されていたことや、その後当地区が、樹木や竹の繁茂するような状況となったことに起因する擾乱等の影響により、全体的に表土部分からは近世以降のものが多数出土しており、また斜面部分からは、遺物がほとんど採集されなかったため、ここでは比較的数量がまとまっている第Ⅰ調査区・第Ⅱ調査区・第Ⅲ調査区について述べてみたい。

第Ⅰ調査区では、表土層中より、全体の半数以上を占める近世のものに混じって、16世紀から17世紀初めの時期の、中国製の白磁や染付及び、国内産の備前焼と土師質土器や瓦が採集されているが、いずれも小片ばかりである。この表土下より検出した遺構面からは、中国製品が染付の碗1点しかなく、他には絵皿を含む唐津焼が30%と、信楽焼の壺及び志野の鉢が1点ずつ見られるものの、組成の主体となっているのは、全体の約半数を占める、皿を主体とする土師質土器である。しかし、この遺構面より検出された、SK02とSK03の2つの土壤内から出土した遺物は、数量的にはそれぞれ17点と49点で、かなり差があるものの、特徴的な組成のあり方をしており、注意したい。まず、SK02の組成は、土師質土器の皿が53%と半数以上を占め、残りは中国製の染付の碗が6%と、絵唐津の碗・皿が30%を占めており、その他では瓦が11%となっている。次にSK03の組成のあり方は、中国製の染付の碗や皿が6%で、国内産の美濃焼の鉄釉碗が2%と、唐津焼が絵唐津の碗や皿を含めて、半数の49%を占め、他に土師質土器の皿が37%含まれ、その他のものとして、瓦が2%と釘が見られる。このように、これら2つの土壤の遺物のあり方は、中国製品が染付のみで量も少なく、国内製品も絵唐津を多く含む唐津焼が主体であり、その他では土師質土器の皿が目立つ程度であって、種類的に限定されるような状況にあるうえ、2つの土壤の遺物のあり方が、量の多少はあるにしても、似たような組成となっているように感じられる。なお、今回この調査区で採集された遺物は、表土層から出土したものと、遺構を検出した部分からの出土は、皆無に等しい状況であった。

第Ⅱ調査区からは、総数20点が出土しており、その組成としては、備前焼の壺と甕が50%と、半数を占めているのが目立つ。また、国内産の唐津焼の碗や皿が15%を占めているのに対して、中国製品は、青磁と染付の皿が、それぞれ1点づつ見られるのみで、この2つを合わせても、全体の1割しか含まれていないことになる。なお、その他のものでは、瓦が25%を占めているのが目立つ程度であった。なお、この調査区より出土した遺物は、全て遺構面上より採集されたものだが、先述のとおり擾乱が激しいため、層位的には今一つ確認できない部分もある。

第Ⅲ調査区では、表土層から何も採集されなかったが、2層目となる暗黄褐色土層より、総数9点の遺物が出土しているが、これらは大きく

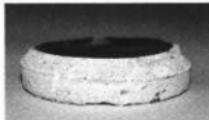
分けると、中国製品と土師質土器を含む国内製品がほぼ半数ずつ出土している組成となっている。まず、中国製品では、青磁が11%を占め、白磁と染付がそれぞれ22%ずつとなっており、いずれも皿ばかりが出土している。次に、国内製品では、備前焼の甕と唐津焼の皿が、それぞれ11%ずつで、土師質土器は、皿が22%見られる。

なお、第Ⅳ調査区及び第Ⅴ調査区からは、表土層より土師質土器の皿の小片が、それぞれ2点と1点採集されただけであった。

■遺物



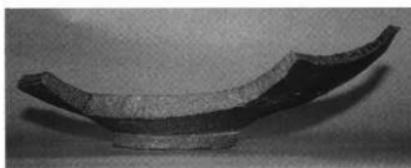
SK02 鉤



SK02 美濃鉄釉碗



SK02 唐津碗



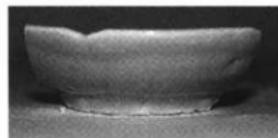
SK03 唐津大皿 (側面)



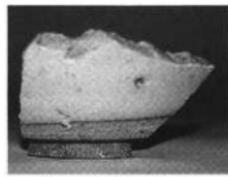
SK02 唐津皿



SK03 唐津大皿 (上より)



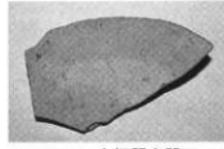
第 II 調査区 青磁皿



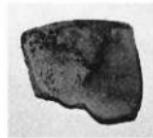
第 II 調査区 唐津碗



SK02 唐津碗



SK03 土師質土器皿



SK03 土師質土器皿

4) まとめ

この花ノ塙地区は、富田城跡の中腹に位置する山中御殿跡と、外辺部分に位置する千疊平等などを繋ぐように立地する曲輪であり、現在堀切等によって3つに分かれているもので、これらの平地部分及び斜面に、いくつかの調査区を設定し、建物跡や石垣等の遺構を検出している。まず、建物跡等の遺構は、3つに分かれている平地の最も北西側に位置する、長さおよそ100m、幅約15mの平坦面より検出したもので、遺構は全て、この平坦面の南東側約3分の1の区域に集中して検出され、残りの約3分の2からは何も確認されず、この2つの区域を分けるように、溝が平地部分を横断している。建物は、合計3棟を検出しているが、そのうちの1棟については、立て替えるによるものか、他の2棟に比べて、柱穴の規模や建物の平面規模等が異なっている。残りの2棟は、平面「L」字状となるように建ち並ぶもので、どちらも2間×5間の比較的大きな規模を持ち、建物を構成している柱穴も、上記建物と比べて規模が大きく、いずれも平面構造形を呈していることから、この2つの建物と先述したものとは、明らかに違うことがわかり、また切り合い関係にあることからして、時期的な差の存在していることが伺える。また、入口跡を伴う櫛列状遺構についてもこの2つの大きな建物跡と、それぞれ一部を共有するよう検出されているため、何らかの関連があったような印象を受ける。なお、これら遺構の時期であるが、遺構面から採集された遺物の組成を見ると、概ね16世紀の後半から末頃と考えられるのだが、前述のとおり耕作等による搅乱の影響は考慮しておく必要はある。しかし、搅乱の影響をあまり受けないと予想される。土壌内より出土した遺物の組成を見ると、唐津焼をはじめとする国内製品が多く、中国製品が微量であることから、遺構面の組成のあり方と、それほどの差がないように感じられる。次に、遺構が全く検出されなかった、平地北西側の区域についてであるが、南東側では良好に遺構が残っていたにも係わらず、これだけの面積から何も検出されないのは、不自然な印象を受けるが、検出した状況からすれば、このような形での利用がなされた時期もあったのであろう。

堀切部分からは、通路跡を確認しているが、これは複数の土を突き固めた版築状の盛土によって造成された痕跡なもので、通路を造成するに当たっての意識が感じられる。また、何度かの埋め立てが行われているようで、当初の状態から多少形を変えながら、かなり長期間にわたって利用されていたような状況が見受けられる。当地からの遺物は、全て2層目にあたる暗黄褐色土層より出土しており、遺構の性格上それほど多く採集されている訳ではないが、その組成のあり方を見ると、中国製品と土師質土器を含む国内製品とが、ほぼ半数ずつ見られるものの、この中には伊万里焼が見られないことから、16世紀の第Ⅳ四半期に属すると思われるが、資料的に乏しく、はっきりしない面は残る。

最後に、石垣についてであるが、部分的には露出していたものもあり、それほど大量の土砂に埋もれていたわけではなく、遺物も全くと言っていいほど採集されていないが、ここで注意したいのは、この石垣が、山中御殿に残る石垣のように、平地を確保するための、周囲を取り巻くようなものではなく、部分的にしか構築されていないことである。石垣を検出した北西側及び中央の平坦地南西側斜面には、いずれも通路が確認されており、特に北西側平坦地斜面から検出された通路は、斜面の断面が3つの階段状となるように設けられ、それぞれの平地側斜面に石垣が構築されている。また、中央の平地についても、石垣は通路の平地側斜面に設けられ、通路の南西側には石垣は見られない。これらのことからすると、この石垣は、平地を確保したり、その周囲を固めるものではなく、斜面上に設けられた通路の幅等を確保することと、それに伴う斜面の補強を目的として築かれているのではないかと考えられる。

■山中御殿

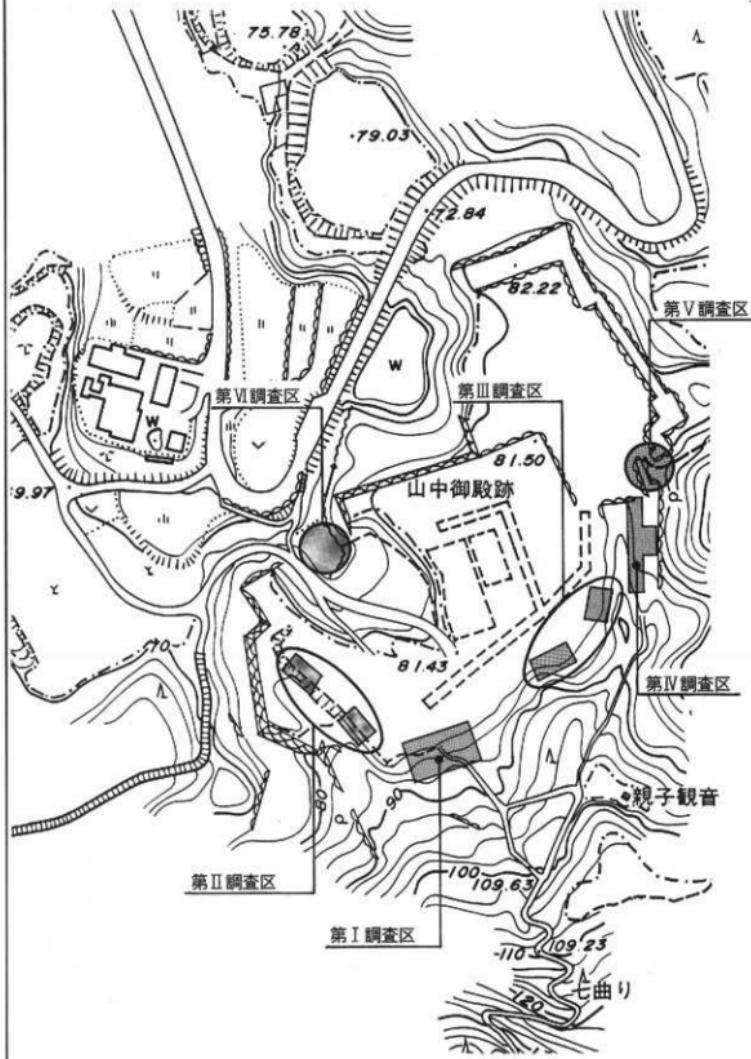
1) 位置

ここは、富田城跡の位置する月山のはば中腹に位置し、現在知られている城内へ繋がる3つの主要な通路である菅谷口・御子守口・塩谷口が合流する地点で、これまで述べてきている千景平等地の曲輪群に続く低丘陵の起点でもあり、月山が立地する南側以外の三方が石垣によって開まれる、およそ $6,000\text{m}^2$ もの広大な面積を有する曲輪であり、通称「山中御殿跡」と呼ばれている。当地は、以前より畠として利用されていたが、その後昭和49年度から昭和56年度まで、史跡の環境整備として、石垣の修復や一部発掘調査を実施し、現在見られる塩谷口で検出された特徴的な門跡や、大型の掘立柱建物跡等を検出しており、他に北側の石垣には埋め込まれた虎口と思われる逆八の字状の積み方の違う部分も確認されている。

この山中御殿跡には、上記のように複数の入口が存在しているため、当地へ至る通路のあり方もいろいろと予想される。例えば、花ノ塙の西側斜面を進んできた通路が、そのまま山中御殿北東側に位置する通称「多門櫓」と呼ばれる石垣土壘の西端を通った後、すぐに平地へ至るとか、あるいは多門櫓西端から、大きく塩谷口方向へ迂回し、通称「大手門跡」と呼ばれる部分から至る等、様々なルートの存在が想定される。

調査区は、山中御殿跡から富田城本城域へ至る、通称「七曲り」と呼ばれる通路への導入部分及びその周辺（第I調査区）と、塩谷口側土壘斜面（第II調査区）及び第I調査区東側斜面（第III調査区）、山中御殿跡南東側に位置する通称「槽台石垣」と呼ばれる石垣及びその周辺（第IV調査区）、山中御殿跡北東隅に位置する菅谷口虎口右垣の上部（第V調査区）と、現在この地へ至るための通路として利用されている、大手門跡（第VI調査区）の計6箇所に設定した。なお、調査過程の中で、検出した遺構の規模及び範囲を確認するため、当初設定した調査区と離れた位置に新たに設定したものもあるが、検出した遺構が一連のものであるため、一つの調査区の中で括して述べるものとする。

■山中御殿調査箇所図 S=1/1,500



2) 遺構

[第Ⅰ 調査区]

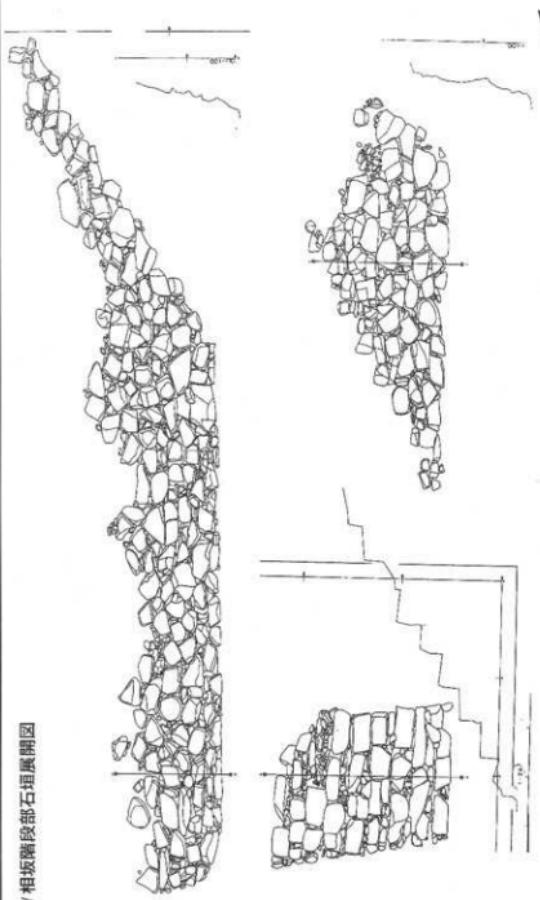
この調査区は、富田城内へ至る3つの主要な入口である普谷口、御了守口、塩谷口が合流し、三方を巨大な石垣によって閉まれた広大な平地を有する山上御殿跡の南側に位置し、山上御殿跡から富田城本丸へ進む、通称七曲りと呼ばれる通路への導入部分に設定した調査区であり、以前よりわずかながらにも、石垣の存在している箇所として知られ、この石垣の全容を確認することから調査に着手した。そして、最も深い部分でおよそ1.5mほどの覆土を除去した時点で、この一部露出していた石垣が階段を伴うものであることが判明し、さらにはそれに正対する位置にも階段と思われるような痕跡が確認されたことから、この部分は既存する塩谷口の入口部分のような、相板階段のようになっていたようであり、またこの相板階段の奥壁部分にも、石垣の存在することが確認された。

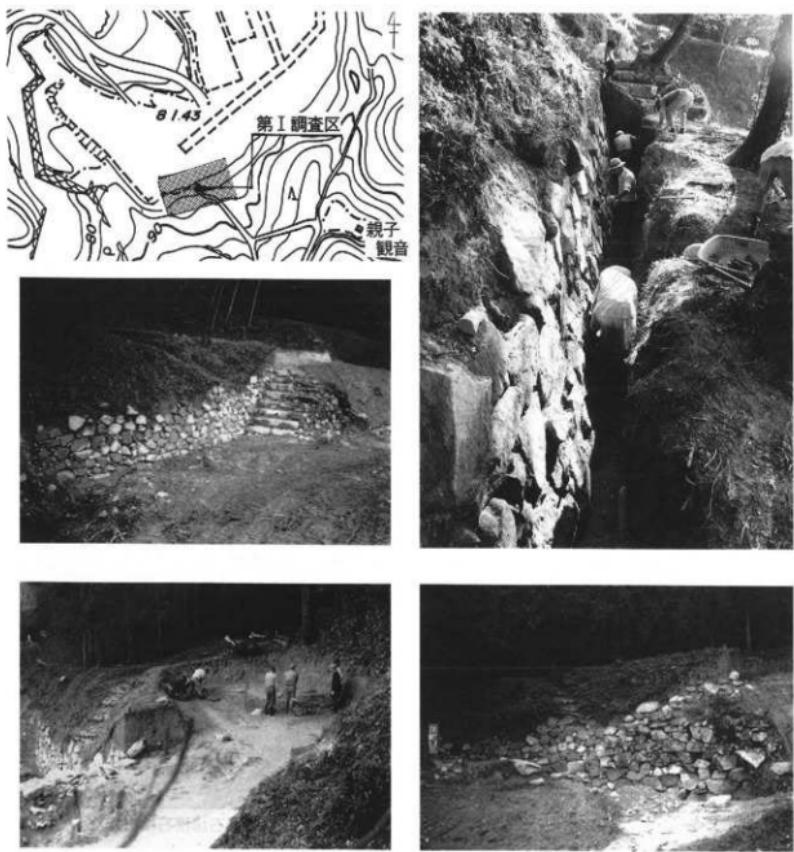
相板階段は、最下段部で約5mの間隔をおいて、それぞれ西へ向かって登るものと、東へ向かって上るものとで構成されている。まず、西側の段数は、全体に崩落は進んでいるものの、比較的残存状態は良好であり、幅約3m、高さ約3.5mの規模をもち、西へ向かって上がっていく合計9段を検出したが、上部については崩落に伴う破壊が進んでいる。階段は、約1mから1.2m程度の割石を用いて造られており、ステップ部分となる石は長方形あるいは板状の大きな石が利用されている。また、階段の外側は、石垣となってそのまま西に位置する塩谷口方向へと続いているようである。なお、この階段を上がりきった部分についても、さらに拡張して調査を実施しており、階段の最上段部よりおよそ4m西側には、かなり崩落が進んでいるものの、約10cmから60cm程度の割石を利用した、南北方向へのびる右列状のものを、長さ約1.5mほど検出しているが、それ以外には何も確認していない。東側の階段は、擾乱によるものなのか、崩落がかなり進んでおり、断面の丸んだ長方形を呈する長さ約1.3m程度の細長い柱状の割石が一つ確認されたのみである。この石は、西側階段の最下段部から東へ約5m程度、奥壁石垣基底部より北へ約1.5mほど離れた位置にあり、奥壁石垣に対して、石の長辺部分がほぼ直角となるような状態で検出している。

奥壁石垣については、上部はかなり崩落が進んでいるようであり、西側は石積階段によって一部隠されているため、全容については不明だが、検出した部分の規模は、高さが約4mとわずかだが相板階段西側の最上段よりも高く、長さは約17mを測り、約10mから1m程度の割石を利用し、北に面を揃えて構築されている。

石積階段の外側を構成している石垣は、先述のように東側のものしか残ってはいないが、全体的に見るとかなり擾乱による破壊が進んでいるようで、上部を構成していたものと思われる石は全て無くなってしまっており、石積そのものも、東側は比較的良好に残っているが、西へ行くほど破壊が大きくなり、痕跡すら無くなってしまう。今回検出した規模は、高さが約2.5mと階段部分より1m程度低く、西の塩谷方向へ約8m延びている。

■第1 調査区 / 相坂階段部石垣断面図



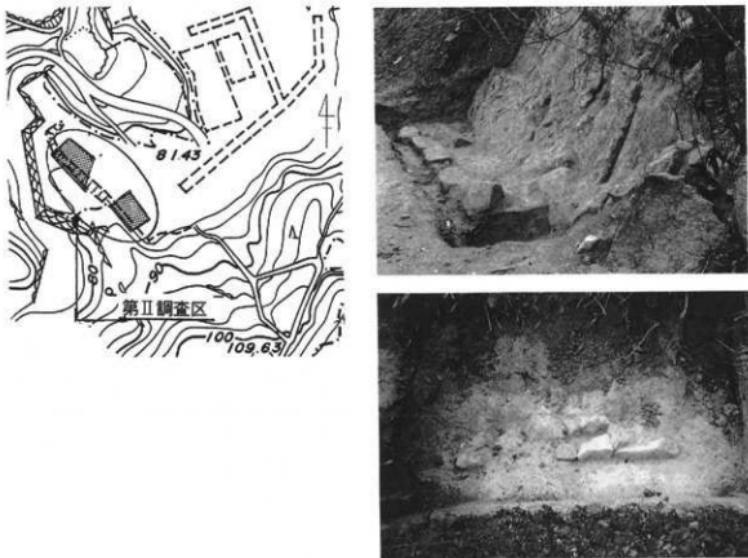


第 I 調査区石垣検出状況

【第 II 調査区】

相坂階段を伴う入口造構が構築されている斜面は、東西両方向へそれぞれ延びているが、西側の斜面は、西側の石積階段最下段部より西の塩谷口方向へ約15mほど進んだ後、ほぼ直角に大きく北へ折れ曲がっており、その南北に延びる土壙の北端付近の斜面基底部付近に、約1m程度の大きな割石が露出していた。その石の周辺をきれいに掘り出してみたところ、地山と石の間には拳大から人頭大程度の裏込石と思われるグリ石が大量に入っており、地上約1.5mほどの高さにまで検出された。この

ことから、この斜面に石垣の存在していた可能性が考えられたため、この地点より更に南へ約20mほど調査区を拡張したところ、斜面基底部の花崗岩の風化層からなる地山部分を溝状に約40cmから50cm程度掘り込み、そこへ約50cmから1m程度の石が石列状に並ぶ、石垣の根石状のものが検出された。なお、この遺構は、搅乱によるものか、基底部の1段しか残っておらず、また所々既に石が無くなっている部分もある。恐らく、第I調査区で検出した相坂階段の東側石積階段外側を構成しながら西へ延びる石垣と、何らかの関係があるものと思われる。



第II調査区石垣根石検出状況

[第III調査区]

第I調査区で検出した、相坂階段西側の石積階段最下段より、およそ15m東側で、相坂階段から東へ続く斜面裾部分に設定した調査区であり、表土下約30cmから50cmほどの深さから、地山斜面裾部分を、溝状に約30cmから40cmほど掘り込んだ中に、約30cmから50cm程度の大きさの割石が大量に入り込んだ、第II調査区で検出した状況によく似たものや、約10cmから50cm程度の大きさの割石を約1.5mの高さに3段程度積み上げた石垣状の遺構を検出した。この石垣状遺構は、面を形成している石と地山斜面の間に、拳大程度の裏込石を思わせる大量のグリ石が入り込んでいる。

なお、この石垣状遺構の西側には、北の方へ延びる石を積み上げたような集石状のものが確認されたが、地山となるものが軟らかい埋土によって構成されており、また搅乱によるものか、面も揃っていないため、あるいは耕作地として利用していた頃のものであろうか。



第 III 調査区石材検出状況



第 III 調査区遠景

[第 IV 調査区]

山中御殿東側に位置し、月山富田城から尾根状となって北方へ延び、端部は方形状に加工され、それを閉むようにして三方に石垣をもつ土壘及びその周辺に数箇所の調査区を設定している。調査区の位置は、石垣土壘を中心として、その東西両裾部分と東側基底部及び、土壘上部に設定した。なお、現在露出しているこの土壘に残る石垣は、全体的にかなり崩落が進んでいるようである。

まず、石垣土壘西側裾部は、土壘先端からおよそ20m月山側に設定したもので、表土下約30cmから50cmの深さで、花崗岩の風化層からなる地山及び、約20cmから60cm程度の大きさの割石を主体とする集石状となつた南北へ約2m並ぶ石列状遺構を確認した。地山は、土壘上部から

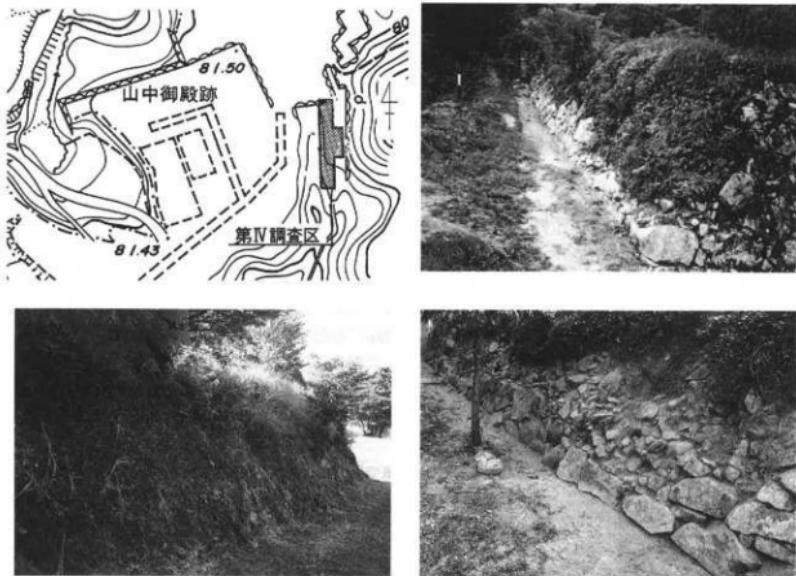
下部へとかなり勾配のきつい斜面となっており、山中御殿跡平地部分との接点となる裾部分には、第Ⅱ調査区で検出したような、深さ約30cmほどの溝状のものが設けられている。石列状の遺構は、北側部分は地山斜面に添うように、かなり接近しているが、南側へ進むほど地山斜面から離れ、第Ⅰ調査区の相坂階段方向へと向かうようである。

次に、斜面を含む石垣土塁東側裾部分には、以前より石垣の存在が知られていたが、崩落が進んでいるため、それほど多くのものは残っていないかった。この残存する石垣の全容を知るため、東側斜面のほぼ全体について調査を実施したところ、土塁先端部から南へ向かって、およそ35mもの石垣が確認された。全体的にかなり崩落が進んでいるため、1段から2段程度しか残っていない部分がほとんどであり、最も残存状態の良好な箇所で高さ約2mの4段程度が積まれている。石垣は、表込と思われる拳大程度のグリ石を除けば、約30cmから1m程度の割石を利用して構築されている。

また、石垣土塁東側基底部は、富田城へ至る3つの入口の一つである背谷口から、山中御殿跡へ入るとすぐ南側に延びる通称「軍用道」と呼ばれる、石垣土塁を右に見ながら本丸方向へ進む通路部分に設けた調査区であり、土塁先端部からおよそ20mほど本丸方向へ進んだ位置で調査を実施した。これは、約20cm程度の表土を取り除いた時点で地山を確認し、この通路を斜めに横断するように設けられた石組みの溝と柱穴を確認した。石組みの溝は、地山を掘り込んだ後、それぞれ南北方向に石を嵌め込んで並べ、地山表面と石の天端がほぼ同じ高さとなるように構築されているうえ、地山が東側で急激に低くなっているため、溝の東側は石積となっている。検出した規模は、全長約7m、幅約50cm、深さ約40cmから60cmを測り、西から東へ向かって傾斜している。なお、溝の西側端部は、石垣土塁裾部から南へ向きを変え、そこから約1m程度南には柱穴3個を検出している。これは、石垣土塁の裾部分から、東へ約1.5m+2mの間隔で並んでいるが、東側端部に位置するものは、擁乱によるものか、全体的にあまりはっきりしない。検出した柱穴の規模は、いずれも平面径が約30cm前後であり、深さは一部ははっきりしないものがあるが、概ね20cm程度を測るものと思われる。

最後に、土塁上部に設定した調査区は、この石垣土塁北側先端部から南へ約20mまでの、土塁上部平地部に相当する幅約5mについて調査を実施し、表七下約10cmから30cm程度の深さから、遺構面と考えられる花崗岩の風化層からなる地山を確認した。この遺構面は、風化による荒廃が進んでおり、表面がかなり荒れたようになっているため、遺構もほとんど確認できるような状態ではなかったが、唯一平面し字状に並ぶ杭列状のものを検出している。しかし、この遺構も遺構面同様風化に伴う荒廃が進んでいるため、はっきりしない部分はある。杭列は、南北方向へ3つが並び、南端から西へは直角に折れ曲がって続いている、南北

間が約1.3m + 70cmの全長約2mを測り、東西間が約1.5mを測るものであるが、この4つ以外には、近年設定されたと思われる測量用の杭が残るのみである。また、この杭列は、石垣土壘先端から約10m程度南側より検出しておらず、北側部分からは何も検出していない。



■第IV調査区/土壘石垣展開図

